

あけましておめでとうございませす

市民のみなさんには健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

本年も、あらゆる世代が安心して暮らせ「行ってみたい・住んでみたい・住んでよかった」と感じていただけるまちづくりを進めてまいりますので、みなさんには、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

筑西市長

須藤 茂

令和4年 新春 対談 寅

今年文化勲章受章者、板谷波山の生誕150年にあたることから、市では記念事業を開催します。そこで今回、波山に造詣の深い3人をお招きして須藤市長との対談を行いましたので、その様子を紹介します。対談者は、板谷波山の孫の板谷駿一さん、波山研究第一人者の荒川正明さん、下館・時の会代表の一本努さんです。

なお、シリーズ板谷波山生誕150年の連載はお休みします。

市長：本日みなさんには、ご多用の中お越しいただきありがとうございます。

今年板谷波山生誕150年にあたることから、市では波山の魅力を全国に伝えるために、波山の名品を展示するなど記念事業を開催します。

そこで、本日はその実行委員であるみなさんに波山への思いをお話しいただきたいと思います。まずは、人間波山、そして作品の魅力についてお話しただけですか。波山のお孫さんである板谷さんいかがでしょう。

命がけの作品製作故の 激しい気性

板谷：若い時の波山は、激しいところが

ある人だったのではないかと思います。

陶芸家として良い作品だけを世に出したい。そのため、少しでもキズがあれば割ってしまう。だから作品の数は少なく、収入も少ない。貧しく苛酷で激しい、命がけの生活だったのではないかと思います。私の知っている波山は70代以降なのですが、本当に腰が低くて、誰に対しても、丁寧な優しい人になっていました。波山自身も、自分は気短かで、怒りっぽいところがあると自覚していて、それを直そうと反省メモを作り、何年もかけて、怒らない優しい人になろうと努力していたようです。

また、波山はユーモアやサービス精神を大事にする人でした。お客さんを自宅

に招いて自ら台所に立ち、うなぎの蒲焼に笹を添えて出したり、キャビアだと思つたら、実は、ほうき草（コキア）の実を調理したものだったりするわけです。

実は、うなぎの蒲焼は豆腐と海苔で作った精進料理の「もどき料理」なんです。こないたずらをして、みんなを喜ばせるのが、波山は大好きでした。

市長：波山研究をされている荒川さんいかがでしょう。

藝術としての陶芸を確立

荒川：明治時代のやきものは、ほぼ輸出品として大量に生産されました。



*モノクロ写真「波山」をカラー化しました



人というお話が出ました
が、観音像や鳩杖には、
それが感じられないです
よね。心の中で、どうやっ
て気持ちの折り合いをつ
け、静かに作品作りを進
めていったのか、興味深
いものがありますね。

学でも同級生でした。
彼はとても早熟で、小
学校4年生生くらいの時
には、シェイクスピア
の『ハムレット』や『ベ
ニスの商人』とかを読
んでいたり、小学校の
図書室の本は全部読
み、県立図書館にまで
足を延ばしたりしてい
る、そんな伝説まで生
まれていました。



板谷駿一さん

その中で波山は、藝術としての日本陶
芸を、世界に冠たるやきものを創造する
ために、ある意味、国から特別に選ばれ
し人というか、責任を負わされたのだと
思います。

たのは筑西（下館）の歴史や文化だとい
う思いが強かった。波山が東京田端の高
台に窯を築いたのも、ふるさとの山・筑
波山が見えるからで、その姿を眺めては、
母のことや故郷のことを懐かしく思い出
したと、NHKのラジオ番組で話してい
ます。苦しい時も故郷を想い、心を温め
ていたのかもしれないね。

ユニークで才能があり、将来何かをや
りそうなどという感じは、ありましたね。
一緒に徹夜で、波山の窯焚きを手伝った
のも懐かしい思い出です。彼も波山から、
お小遣いをもらったはずですが「あの時、
作品を貰った方が良かった」などと言っ
ていました。その後、立花君は、波山展
を見たり、荒川さんの本を読んで、さら
に波山に興味を持ったようです。

いたのですが、出光美術館の学芸員とし
て多くの波山の作品を見たときに、「陶
芸の美」というものを改めて認識しまし
た。明治時代に陶芸を藝術として見つめ
る波山の視野の広さには、いまだに学ぶ
べきことはたくさんありますね。

市長…多方面から波山を調べている一木
さんいかがでしょう。

波山の亡くなる直前の夢が、故郷に帰
る夢で「小山から自動車で行こう」とか
「もう川島に来たかな」などと、うわご
とを言っていたといいます。波山にとつ
てふるさと・筑西は、自分が往く彼岸で
あり、楽園だったのかもしれない。

市長…荒川さん、波山研究のきっかけは
何だったのですか。

一木…20年程前に下館・時の会は建物の
保存ということで活動が始まりました。
ちょうどそのころ、波山没後40年の展
覧会と波山の映画製作という話があり、
その時にこちらにいるみなさんとお付
き合いが始まりました。

故郷に対して出来ること

一木…波山は芸術家として、故郷に対
して何が出来るかを常に考えて、気
負うことなく淡々とユーモアたっぷり
に、楽しく続けていたことは、改めて驚
きますね。板谷さんから、波山は激しい

市長…板谷さんは「知の巨人」と呼ばれ
る立花隆さんとは級友だそうですが、
「もう川島に来たかな」などと、うわご
とを言っていたといいます。波山にとつ
てふるさと・筑西は、自分が往く彼岸で
あり、楽園だったのかもしれない。

荒川…私は水戸の生まれで、父がやきも
の好きで、しばしば展覧会に出かけ、波
山はすごいぞと言っていたことを幼いな
ら覚えています。

市長…そうですね。筑西は、農業・商業・
工業がすべて揃っています。農業を中
心としたまちは、人間の心を豊かにする
のではないのでしょうか。

年展覧会の前に、もっと多くの人たちに
波山を知ってもらいたいという思いで
「波山の夕べ」を開催しました。波山の
夕べは、それから16回開催しています。

たしかだと思えます。
現代の農産物は、ただお腹を満たすだ
けでなく、美味しいという価値が一層重
要になっている。筑西には美味しい農産
物が多く、それはまるで貴重な芸術品で
すよね。今後それに加え、加工技術の開
発やITを活用した宣伝、販売なども大
事になってくるのではないのでしょうか。

教養が深まっていくと経済もよくなって
いくのではないですかね。昔の下館にも
同じような土壌があったのではないで
しょうか。

市長…そうですね。筑西は、農業・商業・
工業がすべて揃っています。農業を中
心としたまちは、人間の心を豊かにする
のではないのでしょうか。

二人の文化勲章受章者を輩出したまち

市長…みなさんの波山に対する強い思い
入れが伝わってきました。さて、話題は
変わりますが、筑西は二人の文化勲章受
章者を輩出しましたが、一方で、農産物
が豊富な農業のまちです。この土壌から、
二人の文化勲章受章者を輩出したこのま
ちを、どう感じていますか。

荒川…栃木県でもそうですが、農産物が
たくさんあって、豪農豪商が核となり、
江戸への流通が盛んになったという背景
があります。そこに、文化人が集まりピ
ジネスだけでなく、楽しみながら文化が
育っていく文人文化の地盤があったよう
に思います。

一木…町民文化が栄えたというのは、周
辺に穏やかない農村部があり、そこが
消費地であったり生産地であったり労働
力の提供地であったりと、周りのおかけ
でまちが成り立っているのだと思いま
す。まちが豊かになって、そこでまた町
民文化が育つ。町民の文化は、地域全体
の豊かさの賜物でしょう。

『波山ここにありき』は、このまちと
豊かな自然だからこそ、誕生したとい
うことではないのでしょうか。

板谷…昔このまちは、綿を栽培して加工
し、鬼怒川を使って江戸に出荷した。生
産・加工・流通と三つ揃って富が蓄積し、
町人文化が繁栄した。波山の芸術的な資
質が、こうした土壌に育まれたことは、

同じように、波山の名品を明治大正期
には、このまちの人たちも持っていて、
実質的にこのまちが波山を支えるという
背景があったのではないかと思います。

これからは、まちの中心が周りに何が
できるかを考えなくてはいけないと思
います。波山は散歩が好きで、農村部へ行
てごくろうさまと頭を下げていたとい
うエピソードをよく聞きます。波山はその
ころから地域のあらゆる人たちを忘れる
ことなく、心を砕いていたんでしょ

今年開催する記念事業は、みなさんの
お力添えがなくては成功しません。ど
うぞ、ご協力をお願いします。



荒川正明さん

波山は、その点でもあり
がたいと感じていたの
はないのでしょうか。
経済と文化はパラレル
で、どちらかがダメだと
どちらもダメになってし
まうと思います。文化は、
経済がダメだと魅力がな
くなってしまふ。まちが
素敵になって、みんなの



一木努さん

板谷駿一さん：波山先生記念会理事長
波山の孫、筑西ふるさと大使
荒川正明さん：学習院大学文学部哲学科教授
筑西ふるさと大使
一木 努さん：下館・時の会代表、歯科医師
多彩な郷土資料蒐集家